

フィールド風

(現場)からの

宮田守男

5月中旬だが冬の厳しさを耐えた山々の木々はまた眠ったままのようだ。春の雨は、生きとし生けるものに生気を与え育む事か

ら、「万惣生」と言われている。

子規の「故郷やどちらを見て山笑う」ではないが、木々の新緑で心に喜びが大きく膨らんでほしいものだ。春耕から田に水が張られ水面には、山々の姿が映える時期だ。高齢化で集積耕作が進み、営農集団による作業風景が年々増えてきている。それに伴い、これまで主に水稻栽培に従事した者が畑作栽培に関心が高まっている。これまでは女性中心だった畑作にも男性陣の作業風景を見かけることが多くなってきた。

最近「半農半X」と言う言葉を聞くようになった。農に親しみつつ、Xでは別のやりた

る。移住を希望する地域類型別の2020年の調査によると、地方都市を挙げる割合が68・5%と相変わらず

レワークは、夢の中の夢と思っていた現実が、皮肉にも普及へ大きく推移したのも確かだ。1994年に塩見直紀さんが提唱した「半農半X」。おだやかに過ぐすライフスタイルである「農的暮らし」が実現でき

賞の池田町からのメッセージ「いまなら北アルプスの眺めを無料でお付けします」・「田舎暮らし初心者も安心」・「田舎なのに大型スーパー、大病院完備。

1人当たりのコンビニ数は東京都とほぼ一緒「故郷愛が溢れた地域魅力の伝え方に思わず拍手だ。(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)

コロナ禍は、田舎暮らしを提案する絶好の機会だ

移住先では、それが「最高の幸せ」になるかもしれないと松本市民タ

が27%といちばん高かった。2019年に本格施行した「働き方改革」

の大切なキーワードになって行くに違いないだろう。

野さんが伝えた。実際、コロナ禍によるリモートワークの定

着によって、地方に移住する人も増えている。コロナ禍によりテ

大北地方に暮らせば、どんな魅力があるのか発信する事も大切だ。第20回an・八十二ふるさとCM大賞NAGANOで最優秀



土曜日東御市で初陣の白馬ソフトボールクラブ練習風景。挑戦は地域への熱い思いからだ。